

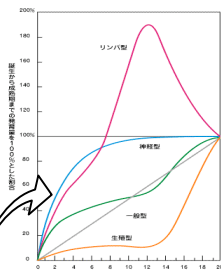
体 育 科

池田 絵里 松田 宏明
木戸 壽和子 高宮 久美子

1 体育科における知識創造とは

体育科における現 状

スキヤモンの発達曲 線



* 1 神経系の発達を見ると、ゴールデンエイジと呼ばれる10歳前後の子どもの多様な運動経験の重要性がわかる。

運動技能

* 2 感覚を手がかりとしてその場に適した方法で運動を行う能力。

身体感覚

* 3 回転感覚、逆さ感覚、支持感覚等、様々な身体感覚のこと。それによって、身体を動かすことが可能となる。

「気づき」

* 4 身体感覚による「気づき」を指す。無意識で行う運動を、身体感覚をもとに言語表現、身体表現で表すこと。

子どもの体力向上をねらい、全国的に様々な取り組みが行われているものの、子どもの体力低下傾向は留まらず、かなり深刻な状態であるという認識が高まっている。しかし体力向上を図るために、児童期において、安易に身体の特長箇所（特定箇所）に負荷がかかる運動や、筋力を高める運動に重きを置いては、身体への負担となるだけでなく、子どもの運動離れに拍車をかけたりすることになりかねない。

児童期は運動神経系の発達がほぼ完成される時期であり、容易に運動技能が習得できる大切な時期^{*1}である。このような発達特性からみても、子どもが運動の楽しさを味わいながら、自らの生活の中に運動を取り入れていくことができるように、教師が働きかけることが重要だと考える。

私たちは、取り上げるそれぞれの運動の特性を活かし、児童期に「運動することは楽しいと実感しその体験を積み重ねていくこと」を大切にしてきた。ここでいう運動の楽しさとは、「運動技能^{*2}を習得し自己の可能性を求めていく楽しさ」「友達とふれ合う楽しさ」「それぞれの運動の特性にふれる楽しさ」「心と体が開放される楽しさ」であり、それらが関連し合う中で、「運動を楽しむことのよさに気づく」ことができると考える。

子どもがめあてをもって運動に向き合ったとき、それまでに培った身体感覚を使って運動を行う。このとき友達と教え励まし合う中で、身体感覚^{*3}の「気づき」^{*4}を共有することができる。それを身につけていこうとする中で、運動技能を習得し自己の可能性を求めていく楽しさを実感することができる。このような一連の過程で、運動の特性にふれる楽しさや、心と体が開放される楽しさを実感することができるだろう。

このような学習活動を積み重ねていくことが、運動を楽しむことのよさに気づくことにつながる。そしてその気づきが、生涯にわたって主体的に運動に親しみ、よりよい生活を形成することへのプロセスとなると考える。

以上のことから、私たちは体育科における「知識創造」を以下のように定義する。

運動を楽しむことのよさに気づき 健康な生活を送るために 自らの生活に運動を活かそうとする営み

2 体育科における「かかわり」の活性化とは

運動に対する価値観

* 5 個々が運動に対して「よい・望ましい」とする評価判断

体育科における「かかわり」の活性化とは、主体的に「気づき」を共有し運動技能^{*5}が広がっていく状態ととらえる。

3 「かかわり」を活性化するために

このような「かかわり」が活性化された学習活動の積み重ねが、「運動を楽しむこと」のために、運動を自らの生活に活かそうとする」体育科の知識創造を、より充実させると考える。

そのために、私たちは以下の二点に主眼をおいて実践する。

一つに、自己に目を向け、「気づき」をうながす。

一つに、子ども同士が安心できる雰囲気の中で楽しく運動に挑戦していくことができる、体育的かかわり^{*5}を育む。

私たちは、どちらか一方ではなく双方に主眼をおくことで、「かかわり」が活性化された状態をつくることができると考えている。

体育的かかわり

* 6 子ども同士が互いに意味や価値をもつ体育的内容において、技

術面・心情面で、協力的・効果的に行動することと考える。

自己に目を向け「気づき」をうながすために、以下にあげる学習環境を整える複数

(1) 自己に目を向け「気づき」をうながす

・適しためあてをもつ

実態把握
めあてをもつ

教師は一人一人の現状を十分に把握し、子どもに適したねらいをもつ。ここで教師は、子どもに教えるべき学習内容と、子どもに気づかせる学習内容を整理する。さらに、ねらいに即した支援・評価を明確にする。その上で学習に臨んだとき、子どもは単元全体の見通しをもつこと、そこでの自己の変容を思い描きめあてをたてることができるだろう。子どもが適しためあてをもつことで、安全に活動ができ、まためあてを達成しやすいことで、自己の変容を認めることができる。

子どもの意識を持続させるために、多くの子どもがめあてとする運動技能を習得させていく。また、以下にあげる環境を整える手だてを行う中で、「気づき」を生むこと、それを習熟させる時間も保障していきたい。

・めあてに即した「気づき」を生む環境を整える

時間の保障

活動の場は、運動領域の特性・系統性を考慮した上で、子どもの実態に即応して設定する。子どもが既習を想起し、よい動きや体の使い方に気づくことができるようにしたい。

場の設定

「気づき」が生まれるためには、適した人数でグループを作ったり、変えたりするといった、教師の即応性が重要である。また、友達の動きと自分の動き、友達同士の動きを比較する中で違いを見つけたり、それを伝え合うことから、「気づき」が生まれてくるだろう。

形態の工夫

そのとき、教師は身体感覚による変容に気づくよう言葉による働きかけをし、自己の体へ意識を向けさせる。発問は、全体での学習課題という場合もある。また子どもは楽しく運動することをめあてとし、教師は高次のねらいをもって学習に臨む場合もある。学習課題に限らず、一人一人に応じた、教師のねらいの達成を意図した言葉による働きかけが大きな支援となる。

教師の言葉による働きかけ

何を見るのか明確にした上で、鏡やビデオ等視聴覚機器を使うことによって、自分の姿や変容を客観的に見る支援となる。客観的に自己に目を向けるためには、自分では気づかない姿を見ることと、流れる動きの中の体の使い方を見る「目」を養うことも大切である。「目」を養うために、機器を使って静止した子どもの姿を映し出し、気づかせていく。養われた「目」では、通常のスPEEDでの運動でも、体の使い方を見ることができ、友達の動きを指摘することにもつながるだろう。

視聴覚機器の活用

・学習ノートを活用する

学習ノートの活用

めあてをもって学習に臨む中で、子どもの「気づき」や思いを学習ノートに記入し活用することを大切にしたい。ただし1時限の運動量をしっかり確保することを念頭において活用する。書くことで、子どもが自己に目を向けること、思いを表すこと、さらに「気づき」や「かかわり」について他へ広めることが容易になると考える。

自己に目を向けて、活動を反芻しながら記入された学習ノートには、運動時には表出されなかった内容も表れる。一人一人の「気づき」を教師がまとめ子どもに返し、共有することで、他の子どもの「気づき」を生むための手だてとなる。また一人一人の「気づき」を広めることで、気づいた子どもは他の子どもから認められることにもなる。そうすることで、学び方を習得し、学習への意識を高めていくことができるだろう。

学習ノートの項目等については、子どもの発達特性を考慮して書く内容を吟味する。学習ノートは、書くことの必然性を子どもがもてるような場を保障しながら活用したい。

まず、体育的なかかわりの重要性について述べる。

(2) 楽しく運動に挑戦していくことができる体育的かかわりを育む

は、

価値観の広がり

学び方

達成感
自己有能感

学習の素地

友達とかかわること
のよさを学ぶ

長期的な取り組み

それまでもっていた運動に対する価値観が広がるということである。またできるようになるまでの運動に取り組む姿勢や、自己に目を向け自ら気づくことは、学び方にも通ずる。このような運動に対する価値や学び方を、体育的かかわりによって他から肯定されることにより、運動にかかわる知識そのものや、それを得た自分に対して、達成感や自己有能感をもつことができるのである。

運動技能の習得には個人差があるが、体育的かかわりの中では、できなくても安心できる、できるようにもう一度挑戦しようとする、周囲もできるように手助けするといった学習の素地ができる。このような学習の場では、一人一人が自分のめあてに対して、集中して取り組むことができ、運動の楽しむことのよさを実感することができるだろう。

次に、そのような体育的かかわりを育むための具体的な手だてを述べる。

体育的かかわりは、運動技能が上達していくように、個に適した場において、友達とかかわることのよさを学ぶ中で、培われていくものと考えられる。

体育的かかわりが見られた場合、共有する手だてをとる。

例えば、子どもが友達の協力で、新しく「気づき」を生み出したとき、教師は、この事実を全体での話し合いの場で表出するように働きかけたり、学習ノートに記述しやすいように工夫を行い、全体で共有させる。表出した子どもは表出したことへの肯定感をもつだろうし、全体の場で認められた子どもも教え励ましあって学ぶことのよさを感じるだろう。そして周囲の子どもは今後の学び方として取り入れていくことになる。

また、友達が自分のことを助けてくれた、認めてくれたという心情的な肯定感は、より強い学習意欲をもたせるだけでなく、できなくてもやってみようとする学習する上での素地をつくる。

また、体育の学習だけでなく日々の学校生活において、互いに励ましたり助け合う仲間づくりを大切にすることが重要である。そうすることで、できなくても、安心して次に挑戦していく学習の場を、様々な場で繰り返し経験することになる。その様な経験を積む中で、体育的かかわりを保ち共に学んでいくことの価値に気づいていくだろう。そうすることが、「かかわり」を活性化することにつながるのである。

＝ 参考文献 ＝

『学校体育用語辞典』 松田岩男・宇土正彦編集 大修館書店 1988

『小学校学習指導要領解説 体育編』 文部省 平成11年5月

『小学校 体育ジャーナル』 みんなの体育編集委員会 学研

『研究紀要』 第59集 60集 本校紀要

『健やかな体を育む教育の在り方に関する専門部会 これまでの審議の状況

ーすべての子どもたちが身に付けているべきミニマムとは？ー』 平成17年7月27日 中央教育審議会